

職業概念と自己実現イデオロギー

The Concept of Occupation and the Ideology of Self-realization

秋山 憲治*

Kenji AKIYAMA

Abstract: This paper aims at clarifying the ideological essence and the social-scientific limitation of the concept of occupation in Japanese sociology. The concept of occupation has been created by Kunio Odaka and authorized in Japanese sociology. The concept is composed of three elements. One of the elements is each worker's demonstration of his own individuality and ability. The element was put into self-realization by Odaka. His understanding of occupation was much influenced by the ideal implication of "Beruf". He emphasized the element of self-realization from the ideological view point of "Beruf". Nowadays self-realization is the ideology which is spread among Japanese workers. The element brings the distorted concept of occupation into Japanese sociology.

1. 職業における自己実現志向

筆者は、すでに公表した小論「職業における自己実現志向の問題性とその背景」¹⁾において、①日本社会全体、特に若年層を中心に職業における自己実現志向が浸透したこと、②それは職業生活の疲弊と職業世界の劣化という陥穽をともなっていること、③A. H. マズローの「自己実現」概念は自己を含む人間や世界の意味を会得するような人格的成長を指していること、④職業世界とその周辺において描かれた「自己実現」像がマズローの概念から矮小化されたものであること、⑤しかしその「自己実現」像が人々を感化すべく美化されて流布し、そこでは職業の実態と内在する問題性を捨象していることを、明らかにした。そして、これらの考察結果を社会諸科学における職業概念に照らし合わせると、社会学の職業概念に潜在している問題性が浮かび上がってくることを、指摘した。

以上を引き継いで本稿では、A:日本の社会学の職業概念自体に「自己実現」という要素が潜んでいること、B:この要素が学術的な職業概念から職業イデオロギーへの変容を促したこと、C:この変容の背後にはドイツの理念的な「天職 (Beruf)」観念が存在すること、D:この「天職」観念が M. ヴェーバーの職業認識から、日本の社会学において職業概念を形成した尾高邦雄の職業認識へ移植されたこと、これらを解明していく。この解明をとおして、職業概念を再考する手がかりを見いだしていく。以上が本稿の目的である。

2. 自己実現というイデオロギー

ここで、前章で取り上げた小論の⑤、すなわち、「自己実現」像が人々を感化すべく美化されて流布し、そこでは職業の実態と内在する問題性を捨象していることについて、概略を説明しておく。それは、本稿が日本の社会学の職業概念における「自己実現」という要素を批判的にとらえる理由を、あらかじめ示しておきたいからである。

「自己実現」への志向性が日本社会に浸透してきたことは、「自己実現」という1語をタイトルに含む図書や雑誌が、さらに「職業」「仕事」「キャリア」または「労働」という2語をタイトルに含む図書や雑誌が、ここ20～30年間に増加傾向にあること、近年の職業に関する世論調査においても「自分にとって楽しい仕事」を理想とする傾向や「自分を生かすこと」を重視する傾向がみられ、特に若年層に顕著であることからわかる。この志向性の浸透に関連して、「自分らしさ」や「個性」に対する拘泥が、「自己実現」を謳うイデオロギーに取り込まれて若年層の職業観や就業行動に反映し、自分らしさを発揮できる仕事、自分の個性を生かせる仕事を探し求めるという「適職信仰」を、若年層に生み出している。そして大学、専修学校専門課程 (専門学校) などによる「卒業後の進路」という宣伝や就職支援産業による「あなたの適性」という助言が、「適職」に対する安易な期待を助長している。しかし、「適職信仰」の若者たちの大半が「適職」に就けるわけではない。この矛盾に直面して困惑と失望を覚え、なかには就職に対して違和感を抱いたり、就職そのものを忌避したりする若者が現れる。また、「自分らしさ」や「個性」に対する拘泥が、不安定

就業の継続や反復をもたらすのである。さらに、「自分らしさ志向」の若者が「やりたいこと」や「好きなこと」を見つけたときに陥るワーカホリック状態が出現している。しかも、自己実現志向の若者たちを「働きすぎ」に向けて高揚させる職務や人事の巧みな管理が存在していると指摘されている²⁾。

以上のとおり、職業——実態としては継続性に乏しいため「職業」という語感からはずれた就業を含む——における自己実現志向には陥穽がつきまとっている。「自己実現」へ傾斜するあまり、無業状態を継続したり不安定就業状態を反復・継続したりするだけでなく、就業を継続しようするとき、ワーカホリック状態に陥る危険性が大きいのである。この自己実現志向は若年層に顕著であるとはいえ、そこにとどまらない拡がりを持ち、今日では年長の層まで浸透している。職業への期待が「自己実現」という罠にかけられ、実在する職業生活の疲弊・職業世界の劣化に対する直視を妨げているといわざるをえない。職業における自己実現志向は単なる諸個人の態度特性ではなく、後述するとおり職業における一種のイデオロギーとしてとらえるべきであろう。

このイデオロギーは、特に職業生活と企業経営の分野、学校教育の分野において現出している。たとえばあるビジネス誌では、職業上の業績を上げて経営的観点から評価されることが各人の自己実現につながるとして、読者を感化しており、他のビジネス誌では、資格の取得が「自己実現」につながるとして、読者を感化している。また、キャリア教育のある施策では、『『夢＝仕事』にしたい』という価値観にもとづいて「自己実現」する働き方が最良であるとして、職業の実態とその構造的背景に目を向けることなく、学生を感化している³⁾。

このような社会・文化状況をふまえて、本稿では、職業における自己実現志向を一種のイデオロギーとしてとらえるのである。そこで、この志向性を単なる諸個人の態度特性ではなくイデオロギーとしてとらえる理由を示しておく。

イデオロギーとは何かについてさまざまな把握がなされているが、最大公約数的に言えば、人間のあり方や世界の成り立ちについての分析的な認識、価値的な意味付与と判断、さらに信念を内包した観念の体系であり、具体的な意見や態度をとまなうものである。本稿では、イデオロギーの存在被拘束性、虚偽意識性、および体系性を重視している。

存在被拘束性とは、階級への帰属と錯綜しながらも、より細かい社会階層的地位や集団・集合体への帰属とそこでの行為という客観的な「存在」ゆえに拘束されて生成した観念である。その観念が整序され、体系化されて「存在」から相対的に自立することによって、「存在」からの乖離が生じる。すなわち、G. ルカーチが指摘するとおり、一方で主観的には正しいもの、す

なわち「真実の意識」として現れ、客観的には社会の変動に相容れないもの、すなわち「虚偽の意識」として現れる。他方で、自分の目標を達成できないと認識するにもかかわらず、自分でも知らない社会の変動を促す意識として現れる⁴⁾。さらにこの観念が、社会における一部の「存在」に拘束されて生成したにもかかわらず、社会における力関係のもとで正当化され、すべての「存在」に対して普遍的に整合するかのようには振る舞うこと、そしてこの観念に浸潤され操作された「存在」を再生産したり、補強したりすることが虚偽意識である。虚偽意識のこれらの作用が、イデオロギーの本質を示している。

本稿ではイデオロギーの把握（イデオロギーをどのようなとらえるのか）ではなく、イデオロギーの機能（どのように作用するのか）を問うている。つまり、ある種のイデオロギーに内在する、普遍性を装った特殊性を抽出することである。この偽装された普遍性を剥ぎ取ることによって、そのイデオロギーに内在する特殊性を明白にできる。このイデオロギーの「特殊性」と「普遍性」とは、K. マンハイムのいうイデオロギーの「特殊的把握」と「普遍的把握」とは異なるものである⁵⁾。

職業における自己実現志向は、プロフェッションをはじめ、個人としての遂行が確立し、職業的自律性の高い限られた職業から構造的に生み出された観念である。それが、自己犠牲をとおした貢献を求める経営方針・経営体質とそれに同調する政策に取り込まれて、普遍性な観念であるかのように脚色され、広範な職業に拡張適用されている。しかし自己実現とはほど遠い実態の大半の職業において、それは虚偽意識として作用している。したがって存在被拘束性と虚偽意識の面からみて、イデオロギーとよぶる観念である。

しかも自己実現志向は、自己本位主義、欲求肯定主義、目的合理主義および業績主義が重なる部分において、「自己の欲求から生じた目標を達成することに価値を置く」という形で相互に結びつけられ、体系化された観念である。体系化されているがゆえに、職業生活、企業経営、学校教育などのさまざまな分野で強い感化をとまなう展開している。近代化の過程を経て、「生業」や「家業」といった就労様式を変革して成立した「職業」の世界には、自己実現イデオロギーが根づきやすい。自己実現イデオロギーの典型は、職業における自己実現イデオロギーなのである。このイデオロギーは、職業における断片的な見解ではなく、個人の働き方や職業世界の仕組みについての認知、評価、判断、信念を内包した観念であるから、イデオロギーとよぶにふさわしい。

ところでH. J. アイゼンクの把握によると、イデオロギーには4つの水準があり、「特殊意見」「習慣的意見」

「態度」という3水準の段階を経て、その上位に「イデオロギー」が位置する構造をなしている。たとえば、自民族優越主義、子どもを厳しく育てること、宗教びいき、愛国心という4つの「態度」の上位に位置するものとして、保守主義という「イデオロギー」を挙げている。すなわち態度水準を超えて体系化されたものを「イデオロギー」とみなしている⁶⁾。

アイゼンクは、イデオロギーを社会の次元ではなくパーソナリティに準じて個人の次元でとらえているため⁷⁾、社会の次元における4水準相互の動態的な融合や転換といった関係は、把握の範囲外にある。存在被拘束性や虚偽意識といったイデオロギーの本質からみて、社会の次元において生成したイデオロギーが個人の次元にも発現するのであるから、保守主義のようなきわめて包括的な観念に、イデオロギーを限定する必要はない。「態度」の水準であっても、社会の次元ではイデオロギーとみなすことができる。

3. 職業の概念からイデオロギーへの媒介

職業の概念は、経済学の観点からの概念と社会学の観点からの概念という二種類に大別される。とはいえ、職業とは、近代化のもとで形成された労働の一形態であり、家業や産業とは異なって、個人単位の継続性をともなう経済的生産活動であることは共通の前提である。

前者、すなわち経済学的職業概念は、収入をともなう労働であることを職業の基本に据えた概念であり、操作的に用いる場合を考慮して、副次的にいくつかの条件を加えている。その条件とは、労働の対価であれば収入には現物を含むこと、家族従業者の場合は収入の有無にかかわらず一定時間以上の従事をもって職業とみなすこと、自分が属する世帯の家事は、その対価として小遣いを得ている場合でも職業とみなさないこと、違法行為や公序良俗に反する行為および受刑者の仕事は職業に含まないこと、などである⁸⁾。

後者、すなわち社会学的職業概念は、3要素を併有する労働を本質とする概念であり、この3要素とは、通説では、①収入の獲得による生計の維持、②分業における社会的役割の遂行、③個性・能力の発揮とされている。社会学的職業概念は、本来的に職業を客観的に把握したものであり、職業のあるべき姿を理念的に描き出したものではない。すなわち、実在の職業すべてがこの3要素を十分に備えているわけではないにしても、本質的にはこれらの要素を程度の差こそあるが含んでいる、という意味である。

たとえば、③「個性・能力の発揮」もあるべき姿ではなく、たとえ単純な労働と思われる場合であっても、個々の具体的な職業活動には、それまでの人生過程において各人各様に身についた個性や能力の差異が表れるのであり、さらに、職業活動をとおして身についた個性

や能力の差異が、その後の職業活動とそれ以外の生活領域にも表れる、ということである。つまり職業をとおした「その人らしさ」の表出である。

このように経済学的職業概念と社会学的職業概念を並べると、両者の視点が根本的に相異なっていることに気づく。経済学職業概念は収入をともなうさまざまな実在の労働を包括的に把握して、職業と非職業とを区別するための概念である。これは労働経済をはじめとする各種の統計データを得るために有用である。一方、社会学的職業概念は、職業と非職業とを区別するための概念ではなく、職業の本質を析出した概念である。これは実在の職業がもつ問題性や今後の職業像を追究するために有用である。

社会学的職業概念は、このように経済学的職業概念に比較して職業に関する問題認識的な性格が強い。とはいえ、前述した3要素のうちの③「個性・能力の発揮」を「自己実現」へと飛躍的に解釈しているか否かという相違が、研究者の間にみられる。その例として、社会学の事典・辞典において職業がどのように把握されているかをみることにする。事典・辞典であるから、執筆者が自説を抑制し、定説化した見解を述べる傾向が強いことはいうまでもない。それでも表1⁹⁾に示すとおり、「自己実現」への言及はほぼ定着している。

表1 社会学の辞典・事典（日本語）の項目「職業」における「自己実現」への言及の有無

書名(版)	出版年	言及の有無	項目執筆者
社会学用語辞典(初版)	1972	無	/
社会学小辞典(初版)	1977	有	記載無
社会学小辞典(増補版)	1982	有	記載無
現代社会学辞典(初版)	1984	有	八木 正
社会学事典(初版)	1988	有	濱島 朗
新社会学辞典(初版)	1993	有	梅沢 正
社会学小辞典(新版)	1997	有	記載無
社会学小辞典(増補版新版)	2005	有	記載無
現代社会学事典(初版)	2012	有	中井美樹

梅沢正は、「職業とは、その現象形態からすると、何らかの機能を通じて社会の分業体系に組み込まれた、収入をともなう労働行為であるが、それがもつ意義にてらして次の二つに区分される。一つはその個人的意義であり、尾高邦雄にならえば、それは個性の発揮、役割の実現、生計の維持ということになる。もう一つはその社会的意義であり、分業を通じて社会が必要とする財貨とサービスが確保されるという点である。——後略——」と事典の説明において述べている。

この見解では、尾高邦雄の所説を紹介しながらも、それが職業の個人的意義からみた把握であることを明確に位置づけている。その所説の紹介においても、「個性の発揮」にとどめ、それを「自己実現」へと飛躍的に解釈してはいない。

一方、「自己実現」へと飛躍させている把握は、職業概念から職業イデオロギーへ向かう経路に踏み込んでいる。

たとえば、同じく事典の説明において職業とは、「社会的分業の成立している社会で、個人が独立の社会的単位として存在するために、自己の生計の維持を図り、同時に社会的連帯と自己実現を目指す持続的な人間活動の様式を指す。持続的な人間活動が職業として成立するためには、第一に、その活動を通じて生存を全うする足る経済的報酬が得られること、これを前提として、第二に、その活動に含まれる社会的役割を遂行することによって社会的分業の一翼を担いうること、第三に、その活動に含まれる自律性を確保することによって個性を伸長し、人間的成長を図りうること、の3点が何らかの形で達成されなければならない。——後略——」（記載なし 1997。下線部は本稿筆者による）とする見解がある。

この見解では、「自己実現」への志向性を内在化させた労働として職業が把握されている。また、「個性伸長」と「人間的成長」の可能性を、職業の成立要件の一つとして位置づけている。すなわち、望ましい人間像を創造する可能性をもった労働として職業を描き出している。換言すれば、この見解では、本質的に職業には疎外克服のような機能がある、ととらえているのである。

ほぼ同一の見解は他にもみられる。濱島朗は、職業とは、「個々人が自立して生活し、その社会的人間としてのアイデンティティを確保するために、社会的分業の一端をにない、それに規定された社会的役割を遂行する過程で、なんらかの程度自己の資質・能力あるいは個性を発揮するかたわら、相互補完的な活動をつうじて人々の依存関係を維持しつつ社会の存続に貢献し、その見返りとして自己の生計を維持するのに必要な一定の収入を取得する継続的なことなみをいう」とし、さらに「職業が『個性の発揮、連帯の実現および生計の維持を目指す人間の継続的な行為様式』（尾高邦雄）であるとされるのは、そのためである。言い換えるなら、人間の継続的活動が職業として成立するためには、その活動が社会的分業の一端をになう役割遂行行為であること、この役割遂行の前提であり結果でもある一定の物質的報酬によって生計を維持すること可能になること、およびこの役割遂行にさいして多少とも個性を伸長し自己実現と人間的成長をはかる余地があること、が必要である。——後略——」と述べている（下線部は本稿筆者による）。続けて濱島は、職業には個人的、経済的、社会的諸側面があり、個性の発揮・伸長と自己実現は個人的側面に該当すると述べており、職業の実態としてはむしろ狭められている、という問題点も指摘している。とはいえ、本来的に職業は「自己実現」や「人間的成長」の可能性を備えているという見解である。

以上二つの見解ほど理念的ではないが、事典の説明に

おいてやはり「自己実現」に言及している見解がある。

八木正は、「職業とは、社会的分業体系における個人の地位と役割を表すものであり、社会的に割り当てられた役割を果たすことにより、その経済的報酬によって自己と家族の生計を支え、その社会的評価によってある一定の社会的地位を得、かつまた個人的能力の発現によって充実感を見出す可能性のある、個人の社会的有用な継続的活動である」とし、さらに「このような意味で、職業は社会と個人とをつなぐ重要な結節点となっている。すなわち、社会的分業体系のなかで、個人がある部署を担当し、職業活動をつうじて社会に寄与することにより、社会は十全な機能を果たし、存続することができる。一方、社会は個人の社会的寄与にたいしてある報酬と評価をあたえるが、個人はそれによって生活を支えるのみならず、生きがいや働きがいを感じ、さらには職業への献身をつうじて自己実現を果たすことも可能である。——後略——」と述べている（下線部は本稿筆者による）。

同様に中井美樹は、「職業とは生計維持の手段として継続的に行われる行為である。したがって通常は、家庭外において有給で行われる労働に限定され、無給の家庭内労働や家事労働は一般には職業とは見なされない」としたうえで、「職業には個人的側面と社会的側面から意義があると主張される。たとえば、職業について体系的研究を行い『職業社会学』を確立した尾高邦雄は、職業の三要素とは、個性の発揮、役割の実現、および生計の維持をめざす人間の継続的な活動であると定義する。個人的側面としては、社会的分業体系のなかで個人は職業を通じて何らかの社会的役割を果たし、その見返りとして経済的報酬を獲得することで生計を維持するという物質的・経済的意味がまずあげられる。さらに個人は職業において自己の能力や個性を発揮し社会に寄与することとなり、それによってやりがいや生きがいを感じ、職業を通じて自己実現をはかることができる、といった精神的側面を職業はもつ。また個々人がこうした役割（「職分」）を担うことは社会の側からすれば、社会的分業体系を成り立たせ、すなわち社会的連帯を実現させることとなる。またそれゆえに社会の存続や発展に職業は貢献・寄与している。こうした点から、職業は個人と社会の結節点であるとの指摘が研究者によりなされてきた。——後略——」と述べている（下線部は本稿筆者による）。

以上二つの八木と中井の見解は、場合によっては生きがいや働きがい以上の「自己実現」の可能性のあることを職業に見出している。両者の見解において、もちろん職業への従事が各人の自己実現に直結している、あるいは自己実現をもたらすと短絡しているわけではなく、自己実現への可能性や志向性を潜在化させた営為として、職業をとらえている。しかしながら潜在化とはいえ、職業について「自己実現」は「個性・能力の発揮」を超え

た性格規定である。

事典・辞典における見解を以上確認したとおり、梅沢以外の見解、すなわち執筆者不明(1997)、濱島(1988)、八木(1984)、中井(2012)の見解では、濃淡の差異はあるものの、職業概念における重要な要素として「自己実現」を認めている。

4. 日本社会学の職業概念における「自己実現」の源泉

前章から明らかなとおり、尾高邦雄の見解が、事典・辞典の「職業」項目においていわば定説として引用されたり、紹介されたりしている。濱島(1988)、梅沢(1993)、中井(2012)の見解は、尾高の見解に直接言及している。

引用されたり紹介されたりした尾高の見解は、「個性の発揮、役割の実現および生計の維持をめざす継続的な人間活動である」¹⁰⁾という職業の一般概念を中心に据えたものである。つまり、「個性の発揮」「役割の実現」「生計の維持」という3要素である。もちろんこの概念規定にとどまらず、この職業概念が論理的な理想形態であって実在するほとんどの職業は3要素が均衡していないこと、この3要素が機械的に並立しているのではなく、相互に有機的な連関をもっていることなどを、尾高は指摘している。

この職業概念には「個性の発揮」「役割の実現」「生計の維持」という3要素が組み込まれているが、この見解に先立つ尾高の見解では、「生計維持のためになんらかの報酬を得ることをめざす継続的な人間活動」であり、かつ「一定の社会的分担もしくは社会的役割の継続的遂行」というとおり、二つの面から職業を規定していた¹¹⁾。この規定では、後の「個性の発揮」に該当する要素は二つの面と同等には顕在化していなかった。そして職業がさまざまな精神的報酬を与える、および社会的役割としての職業は本質的には各人の個性能力の発揮をとおして遂行される、という指摘の中に潜在化していた。

尾高の見解において「自己実現」が登場するのは、3要素にもとづく職業概念の提起より後のことである。その「自己実現」は、当初、「個性の発揮」の言い換えだった。すなわち、「個性の発揮というのは、自己実現とか能力発揮とかいうふうに言い換えることもできるでしょう」という把握である¹²⁾。

この言い換えが、その後は以下のとおり、「自己実現」の可能性を論じるように発展する¹³⁾。それは、「職業の三要素のうち個性と能力の発揮に力点を置いて職業活動を解する」ことが、当時の社会における支配的な見方であることを背景としている。「職業活動に生活の中心をおく現代人の多くは、職業活動においておのれの個性能力を発揮し、これを通じて自己実現の達成をは

かろうとしている」、つまり人びとは個性発揮の到達点に「自己実現」を思い描いていると、尾高は認識している。そこで尾高は、自らの職業概念をふまえて職業における「自己実現」を定義している。尾高による「自己実現」とは、A.H. マズローの欲求階層説において最上位に位置する「自己実現」とは異なるとし、また心構えや生活設計ではなく実際の行動や業績を指している。すなわち、「ある分野で従来なんびともなしとげておらず、しかも人類の共同生活の質的向上のためにそれが果たされることが必要な、何らかの課題(タスク)を達成すること」であり、その課題は偉大である必要はなく、無関心な人から見れば些細なことであってもよいが、それは「新しい価値を創造する行為」であるとしている。

ただし個性や能力の発揮がすべて自己実現に結びつくわけではなく、自己実現に到達するには三つの条件を満たすことが必要としている。三つの条件のうち第三の条件を尾高は力説しており、「仕事そのものために、課題の達成それ自体のために、没我献身すること」が必要であるとしている。あらゆる仕事において最善の仕上げに求められるルールがあるとし、「このルールに従っておのれの個性能力を最大限に発揮し、努力に努力をかさねて、かれら自身が発見したユニークな課題を、考えるべき最善のかたちで達成すること——それが職業における自己実現ということ」であると述べている。

前述したとおり、尾高は自ら提起した「自己実現」は、マズローの欲求階層説における「自己実現」とは異なると述べている。しかしながらマズローが提起した「自己実現」とは、「至高経験」とおして「存在価値」を体得するという人格的成長をとげた、心理的に健康な人にみられる特徴である。マズローによれば「至高経験」とは、その人間を変え、その人間による世界の感じ方・とらえ方を変える経験であり、創造、美、愛情、洞察、快感、神秘などへの感銘を契機として、人間内部における統合、その人間と世界との統合を生み出す経験である。マズローの「自己実現」が「私の願望実現」や「私の目標達成」でないことは明らかである。進学、資格取得、就職、結婚、昇進、独立開業、マイホーム入手など、人生過程の節目になる程度の目標達成とは次元が異なっており、営為や経験をとおして自己を含む人間や世界の意味を会得するような人格的成長を指している。

尾高も「何でもよいからそのうえで自分の個性や能力を発揮しさえすれば、それが自己実現になるのではありません」と注意を喚起している。そして、「ある重要な社会問題の解決に寄与するユニークな書物を書いて出版する」「普通の感冒の特効薬を発見して、簡単で有効な治療法を完成する」「人跡未踏の未開地帯を探検して新しく便利な交通路を開発する」などの活動実績を、「自

己実現」の具体例として挙げている。

確かにこれらは、単なる「私の願望実現」や「私の目標達成」でなく、社会的な有用性を創出する活動であろう。しかし、マズローのいう「自己実現」、すなわち自己を含む人間や世界の意味を会得するような人格的成長とは明らかに異なっている。マズローの「自己実現」には、尾高の「自己実現」以上の奥深い意味が込められている。

こうして職業の3要素のうちの「個性の発揮」を質的に高度化したものとして、尾高は「自己実現」を位置づけている。そして、安易な態度や行動では「自己実現」に到達できないと戒めているとはいえ、職業において「自己実現」を究極の目標としてとらえている。尾高が職業における「自己実現」を重視し、それに価値を置いていることは明らかである。

この見解は、M. ヴェーバーが提起した職業倫理に関する尾高の解釈の中にすでに胚胎していた。自ら従事する職業の専門分野に全力を集中すべきという禁欲的職業倫理に関する古い論考¹⁴⁾の中で、次に述べるとおり尾高は、ヴェーバーのいう「ザッヘへの献身」に着目している。

「ザッヘへの献身」とは、「与えられた仕事のために、文字どおり自己を犠牲にし、個性の発揮を断念することではない」のであり、「仕事そのもののものつルールにしたがいつつ仕事に専念すること、つねに、より困難な仕事をめざし、より完璧な仕事の出来ばえをめざして努力すること、そしてこれによって結果的には真の自己実現に到達すること」を意味すると述べている。続けて尾高は、この到達が一つの理想状態であって万人にとって可能ではないことを説いている。それでも、本人の力量と外部環境が整っていれば、「学問を生涯の職業とする人びと」「各種のプロフェッションに従事する人びと」さらには「これら以外の一般の職業のばあい」でも、「自己実現」への到達が可能であると説いている。「一般の職業」でさえ、「人びとの側にそれに適した能力や経験があり、職場の側にはかれらに適した作業条件や組織構造が与えられている」のであれば可能というわけである。ただし問題は、「結局において、これらの一般的な職業に従事する人びとが、かれらを取り巻く怠惰や享楽への多くの誘惑に打ちかって、どれだけ仕事に献身する心構えをもちつづけるか、という点にある」と尾高は強調している。

このように職業における「自己実現」をめぐる尾高の見解を辿ると、職業における「自己実現」が「倫理」に絡められていることがわかる。「個性発揮」という職業概念の3要素のうちの一つから変容し、理念的な職業像として「自己実現」への到達が描き出されている。職業のあるべき姿としての「自己実現」なのである。これは社会学からみた職業概念の一部分というよりむしろ、職業イデオロギーとしての性質が色濃いといえよう。

尾高は「自己実現」に関連して、M. ヴェーバーが提起した職業倫理とは別の角度から、「ルネサンス的労働観」に言及している¹⁵⁾。それは、尾高によれば、真の労働は創造的でなければならないから、労働は自己実現の方法であり、それ自体が楽しみでもあるという労働観である。尾高は、この労働観が、カーライルやラスキンにとどまらず、実はK. マルクスの労働観でもあり、マルクスが労働者の自己疎外の対極に措定したのは、「ルネサンス的労働観」が描き出した労働であるとしている。ここには、自己疎外へのアンチテーゼとしての「自己実現」という尾高の把握を見いだすことができる。

以上、職業概念をめぐる「個性の発揮」から「自己実現」へと、尾高の見解がどのように展開してきたかを跡づけてきた。「自己実現」をめぐる、尾高がヴェーバーのいう「ザッヘへの献身」から影響を受けたことは明らかであり、この点は尾高本人が複数の著作中で自認している。「ザッヘへの献身」について尾高は、「職業において本当に自己を実現し、己の個性を発揮することができるものは、職業が命じるザッヘ(仕事)に専念し、これに己を捧げつくす人だけであるという思想」であるとしている¹⁶⁾。

しかしながら、尾高がそれから影響を大きな受けたヴェーバーの著作『職業としての学問』にも、職業に関連したヴェーバーの他の著作『職業としての政治』にも、「自己実現」に該当する語(*Selbstbetätigung*)やそれに近似する語は用いられていない¹⁷⁾。もちろん、心理学とその周辺領域で用いられる「自己実現」に該当する語(*Selbstverwirklichung*)は、見あたらない。これらの著作中で強調されているのは、「自己実現」への到達ではなく、天職(*Beruf*)としての自覚にもとづく仕事への没頭である。強いていえば、職業としての政治は、それに献身する者が条件を満たせば、本人に「内的な喜び」(*inneren Freuden*)を与えうると述べている程度である¹⁸⁾。職業における「自己実現」は、職業や倫理に関する内容をもったヴェーバーの諸著作を参考にして、尾高が「自己実現」という語で独自に解釈したものといえよう。

むしろその対極にある「自己疎外」に尾高が言及しているとおり¹⁹⁾、マルクスの著作『経済学・哲学草稿』とマルクスとエンゲルスの著作『ドイツ・イデオロギー』において、「自己実現」に該当する語(*Selbstbetätigung*)が用いられている²⁰⁾。これは、疎外された労働から転換するはずの生産的活動としての「自己実現」である。ただし訳書では「自己表出」ないし「自己活動」と表現されており、これは *Selbstbetätigung* が、自己実現への到達状態ではなく自己実現を図る行為ないし活動を

含意するからだと考えられる。

前述した諸著作において、ヴェーバーは、私欲を超越した仕事そのものに対する禁欲的な没頭を職業の様相として重視しており、マルクスは、疎外された労働の克服を自由な人間活動の開花として重視している。一方、尾高は職業の理想状態として「自己実現」への到達を重視している。職業における「自己実現」というイデオロギーは、主にヴェーバーから間接的な影響を受けているとはいえ、直接的には尾高の職業観に由来している。

5. 自己実現イデオロギーからの脱却へ

職業における「自己実現」というイデオロギーが尾高の職業観に由来するとしても、それがなぜ日本の社会学における職業概念を着色したのであろうか。

第4章で述べたとおり、尾高による研究は日本の社会学において、また世界の社会学において、「職業社会学」の嚆矢だったといえる。この点は尾高自身が、アメリカで職業社会学の先駆となる書籍が出版されたのは1950年以降であると述べている²¹⁾。尾高の研究が世界的にも職業社会学の嚆矢に該当するのであれば、その後の日本の社会学が、積極的に尾高の職業概念を継承することは、一見すると「自然な流れ」だったように思われる。社会学の辞典・事典においても、第4章で述べたとおり、職業概念をめぐる濱島(1988)、梅沢(1993)、中井(2012)が、尾高の見解に直接言及している。この言及は、日本の社会学が尾高の職業概念をいわば標準形として位置づけたことの現れといえる。この位置づけも「自然な流れ」のなかに位置するかにみえる。

しかし尾高の職業概念には、ドイツの *Beruf* に込められた天職的な色調が濃厚である。すなわち、*Beruf* としてとらえれば、「職業はたんなる労働ではなく、同時にその人にとって喜びともなり、使命でもあるところの労働である」²²⁾。尾高が指摘したとおりドイツ語の *Beruf* がプロテスタンティズムの労働倫理を背景に「労働」と「召命」との両面を併有した概念であるとしても、他方で英語の *occupation* に典型的にみられる職業概念が対置されている。*occupation* とは本来的に時間的、空間的な占有を含意するため、それに依拠する職業概念として、職業 (*occupation*) とは「成人の社会成員によって果たされる社会的役割」の一種であり、「成人の生活において、直接・間接に社会的・金銭的な帰結を生み出し、かつ主要な関心の的をなす社会的役割」²³⁾という把握がある。すなわち、「召命」のような理念的な性質を帯びない職業概念である^{注1)}。

このように *Beruf* とは異なる職業概念が存在している。この点は、尾高自身も「天職」ないし「職分」的な職業と「生業」的な職業との二重性、また「職」と

「業」との二重性に言及している²⁴⁾。しかしながら、すでに辞典・事典の記述をみたとおり、尾高の見解は、日本の社会学において所与のものとして扱われた傾向が否めない。日本の社会学にとってあるべき労働の姿の追究は暗黙の前提とされ、労働のそのような理念的な把握に対して、尾高の職業概念は整合的だったと考えられる^{注2)}。「個性伸長」と「人間的成長」の可能性を内在させたものとして職業をとらえた濱島の見解(表1: 濱島1988)が、その典型である。日本の社会学において、尾高の職業概念は批判的な視線を向けられる機会なく、受容されたものではなかろうか。そして、その延長線上には、職業をめぐる社会意識に対する「自己実現」イデオロギーの浸透という実態がみられる。

職業概念をめぐるこのような状況に対して、「自己実現」から距離を置いた職業概念を再定義、再確立し、そこに込められた含意をふまえて、職業世界の構造的実態やそこから生じている必然的現象を解明する必要がある。その含意とは、イデオロギーに替わるとはいえ、単に社会的役割のありように集約されるものではないと考えられる。そうではなく、職業に従事しようとする、従事している、あるいは従事していた者の生活や人生の営みという視点であると考えられる。その視点から、社会的実体としての職業が成立した過程と論理を追究することが、まず不可欠であろう。

注

注1) もちろん英語にも「天職」を意味する理念的な職業概念がある。

注2) 疎外された行為としての「労働」に対して、創造的な行為としての「仕事」を指定することは、労働観に関する研究に幅広くみられる。

文献

- 1) 秋山憲治「職業における自己実現志向の問題性とその背景『静岡理工科大学紀要』第23巻(2015年)。
- 2) 同前論文、40-42 ページ。
- 3) 同前論文、43-46 ページ。
- 4) Lukács, G., *Geschichte und Klassenbewußtsein, Studien Über Marxistische Dialektik*, (Berlin, Der Malik-Verlag, 1923), 城塚登・古田光訳『歴史と階級意識』白水社、1991年、107 ページ。
- 5) Mannheim, K., *Ideologie und Utopie* (Frankfurt am Main, Schulte-Bulmke Verlag, 1952), 高橋徹・徳永恂訳『イデオロギーとユートピア』中央公論新社、2006年、127、148 ページ。
- 6) Eysenck, H.J., *Sense and Nonsense in Psychology* (Penguin Books, 1957), 小見山栄一訳『心理学における科学と偏見』誠信書房、1961年、250-252 ページ。
- 7) Eysenck, H.J., *Dimensions of Personality* (Routledge and

Kegan Paul Limited,1947),pp.28-31.

- 8) 総務省編『統計基準 日本標準職業分類 (平成 21 年 12 月設定)』統計情報研究開発センター、2010 年、43 ページ。

- 9) 鈴木幸壽ほか監修『社会学用語辞典』学文社、1972 年 (初版)。

濱島朗・竹内郁郎・石川晃弘編『社会学小辞典』有斐閣、1977 年 (初版)、1982 年 (増補版)、1997 年 (新版)、2005 年 (増補版新版)

北川隆吉監修『現代社会学辞典』有信堂、1984 年。

見田宗介・栗原彬・田中義久編『社会学事典』弘文堂、1988 年。

森岡清美・塩原勉・本間康平ほか編『新社会学辞典』有斐閣、1993 年。

大澤真幸・吉見俊哉・鷲田清一編『現代社会学事典』弘文堂、2012 年。

- 10) 尾高邦雄『職業社会学』(尾高邦雄選集第 1 巻)、夢窓庵、1995 年、41-53 ページ。

- 11) 尾高邦雄『職業の倫理』中央公論社、1970 年、73-80 ページ。

- 12) 同前書、344-348 ページ。

- 13) 尾高邦雄『仕事への奉仕』(尾高邦雄選集第 2 巻)、夢窓庵、1995 年、254-262 ページ。

- 14) 尾高、前掲『職業の倫理』27-37 ページ。

- 15) 同前書、39-40 ページ。

- 16) 同前書、337 ページ。

- 17) Weber,M.,Wissenschaft als Beruf, in:Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre, (Tübingen, Mohr,J.C.B. Verlag, 1922).

Weber,M.,Wissenschaft als Beruf, (München,1919), 尾高邦雄訳『職業としての学問』岩波書店 (岩波文庫)、1980 年。

Weber,M.,Gesammelte Politische Schriften, in: Winckelmann,J. (Hrsg.), Dritte erneut vermehrte Auflage, (Tübingen,1971),

同前訳書、脇圭平訳『職業としての政治』岩波書店 (岩波文庫)、1980 年。

- 18) Weber,M.,Gesammelte Politische Schriften,S.545.

脇訳、前掲『職業としての政治』76 ページ。

- 19) 尾高、前掲『職業の倫理』56、62 ページ。

- 20) Marx,K., Ökonomische-philosophische Manuskripte, 藤野渉訳『経済学・哲学手稿』大月書店 (国民文庫) 1963 年、および城塚登・田中吉六訳『経済学・哲学草稿』岩波書店 (岩波文庫)、1964 年。

Marx,K., und Engels,F., Die Deutsche Ideologie, Werke,Band3,S.5-530, (Dietz Verlag,Berlin,1969).

Marx,K., und Engels,F., Die Deutsche Ideologie, (1845-1846), 真下信一訳『ドイツ・イデオロギー』大月書店 (国民文庫)、1965 年、および廣松渉編訳・小

林昌人補訳『ドイツ・イデオロギー』岩波書店 (岩波文庫)、2002 年 (新編輯版)。

- 21) 尾高、前掲『職業社会学』261 ページ。

- 22) 同前書、47 ページ。

- 23) Hall,R.H., *Occupations and the Social Structure*, 2nd ed.(Prentice-Hall,1975),p.6.

- 24) 尾高、前掲『職業社会学』45-47 ページ。